

80年前の透視図が導くこれからの建築

都市を志向した20世紀的建築から田園を志向する21世紀的建築へ



種田 元晴

MOTOHARU TANEDA / 種田建築研究所

1982年 東京都生まれ
 2005年 法政大学建築学科卒業
 2011年 (有)種田建築研究所入所
 2012年 同大学院博士課程修了博士(工学)
 2012年 東洋大学助手
 現在 法政大学 / 東洋大学 / 桜美林大学 非常勤講師

立原道造という詩人がいました。第一次世界大戦がはじまった1914年に生まれ、第二次世界大戦がはじまる1939年に亡くなった、夭折の抒情詩人です。夢、花、鳥、風などの言葉を好んで美しい自然をうたい、そこに他者への愛を優しげにのせる彼の詩は、80年経った今でも多くの人々に愛され続けています。

学生時代、塾講師として国語を中学生に教えていた頃に、立原道造を知りました。「国語便覧」という、カラーで諸知識が整理された副読本を通じてでした。巻末に作家の一覧があるのですが、そこに突如として若い姿が現われます。それが立原道造でした。彼のプロフィールを見て驚きました。彼は詩人として著名なだけでなく、建築家でもあったと書いてあったからです。これは気になりました。

立原は、東京帝国大学建築学科に学び、設計課題作品が毎年表彰されるなど、将来を嘱望されるほどに建築にも才能を発揮した人物でした。しかし、24歳の若さでこの

世を去ってしまいます。そのため、実作がほぼなく、その建築活動はほとんど知られていません。

実作のない立原の建築家としての成果物は、建築図面です。とくに立原は、建築の外観を描いた透視図を数多く残しました。なかなか上手です。これらをよく観察してみたところ、建築よりもその背景となる自然風景を積極的に描いたものが多いことに気づきました。

そのなかに、どうしても気になって仕方のない一枚のスケッチがありました。それは、大学の課題として取り組まれた、小学校の鳥瞰スケッチでした。

ふつうだったら都市部を想定して計画するはずですが、立原は、足繁く通い、こよなく愛した浅間山麓を敷地に選んでいます。そして、山をまるで主題であるかのように中央に大きく鮮やかに描き、当の建築は小さく淡く端に描かれてしまっています。なんですかこの描き方は。建築を表す図なのにあり得ないでしょう。もちろん、そう思いました。しかし次第に、これはこれでとんでもない意思表示なのではないか、と思えてくるのでした。

ところで、東大建築学科で立原の一級下には、丹下健三がいました。戦後日本の建築・都市の発展に果たした丹下の影響は多大です。そんな丹下と立原は友人同士でもありました。丹下は立原のことを晩年に思い返し、「私とは性格も違うし、考える方向も違っていたが、それがかえって影響し刺激し合う仲にさせた。私が大学を卒業した翌年に亡くなられたが、青春時代、鮮烈な光ぼうを放って私の目の前を通り過ぎた一人である」(丹下健三『一本の鉛筆から』日本経済

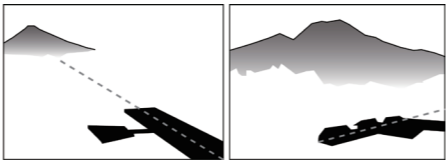
新聞社,1985)と、その存在の大きさを語っています。

先ほどご紹介した立原道造のスケッチ「無題 [浅間山麓の小学校]」は、浅間山を描いたものでした。立原は、この他の透視図にもしばしば浅間山を描きます。代表作と目される卒業設計も、浅間山麓に芸術家たちの理想郷を構想したものでした。

立原は、東京は隅田川沿いの問屋街に生まれました。都会に暮らしながらも、豊かな水辺の自然に触れて育ちます。体の弱かった少年期の立原は、毎夏を青梅の御岳山麓で過ごしていました。大学生になり、詩人としても名が知られるようになると、文学仲間が多く集う浅間山麓へ通い出します。「都市」で育った立原は、避暑地である浅間山麓での村暮らしを通じて「田園」の豊かさを知ります。こうして彼は、詩の舞台として、また、建築の舞台として、浅間山麓の風景を拠りどころとするようになっていきます。

一方の丹下は、富士山を建築に持ち込みます。そのもっとも有名なものが、立原の死後、戦時中に開催されたコンペ「大東亜建設記念営造計画」の一等入選案です。

1942年、真珠湾攻撃の成功に勢いづいた日本は、アジアを欧米の支配から解放し、代わりに日本を盟主とした大東亜共栄圏を築こうとしていました。「大東亜建設記念営造計画」は、その大東亜共栄圏確立のために、日本の権威を国内外に示す象徴の提案を建



山と建築の関係



丹下健三 / 立原道造 (筆者画)

築家たちに求めたコンペでした。

丹下は、「日本の最も崇高なる自然」である富士山と東京を道路で結び、その道路上に神国日本を象徴する「忠霊神域」を提案して、喝采を浴びました。この計画はその後、東京オリンピックの翌年に丹下が唱える「東海道メガロポリス」構想へと引き継がれていきます。

さて、もう少し具体的に、二人の透視図を見てみましょう。まずは、建築の描かれ方を比較します。立原の図では、建築は、フリーハンドで薄く描かれ、中央に構える浅間山に包み込まれるように平行に配されています。一方の丹下の図では、建築は明瞭な直線ではっきりと描かれ、軸線の果てにそびえる富士山と対峙しています。立原の建築は、まるで自然風景の一部であるかのように、脇役としてひっそりと佇みます。丹下の建築は、富士山の存在さえもその一部であるかのように、主役として堂々と構えています。

山の描かれ方についても注目してみましょう。立原の浅間山は、まるでポール・セザンヌの「サント＝ヴィクトワール山」のように力強きのびやかに鮮やかに描かれています。丹下の富士山は、江戸時代の画家・谷文晁の描く南画のように淡く鋭く描かれています。立原の図には、セザンヌと同じく、自身の愛した山への想いが溢れています。丹下の図では、日本の威厳を象徴する記号として、富士山の荘厳さが強調されています。

この二つの透視図には、それぞれの建築に対する想いが良く表れていると思います。建築を自然の一部であるかのように描いた立原は、田園を志向した建築を求めました。一方、自然を建築の一部であるかのように描いた丹下は、都市を志向します。

立原の田園志向と丹下の都市志向とは実に好対照をなしています。晩年の丹下が振

り返っていたように、二人はよきライバルだったといえるでしょう。しかし、立原は戦後を生きることができず、丹下は戦後の建築を牽引する存在となっていました。

やがて、丹下や彼に続く戦後の建築家たちは、焼け野原になった都市をとにかく再興・発展せねばとの渴望を抱き、そして、都市に寄与する建築を作り続けてゆくこととなります。

ところで、私の本業は、建築設計事務所勤務です。どちらかといえば、狭小敷地にビジネスホテルや共同住宅などのビルものを建てることを得意とする事務所に所属しています。このような事務所の場合、相談を受けた敷地に対して、関係法令を瞬時に読み解き、迅速かつ経済的・合理的にプランニングし、即座にレスポンスすることが求められます。とにかくスピード感こそが命です。

世の中に建築を建てたいという要求が溢れている限り、このビジネスモデルは成功するでしょう。少なくとも、弊社の創業者は30年近くそれを続け、数十棟のビルを建ててきました。日本の多くの設計事務所でも、似たような仕事が続けられてきたことでしょう。

もちろん、目の前の問題解決に誠心誠意を尽くされてきた仕事ぶりに対しては、深甚の敬意を表します。しかし、自らの首を絞めるようではありますが、これは、人工環境の充実を目指し続けた20世紀的な仕事の仕方ではなかったでしょうか。物質的な豊かさの飽和しきった21世紀の我々が、これをそのままに引き継ぐべきとは到底思えないのです。実際、弊社の創業者ですら、いまでこそ忙しく仕事が舞い込んでくるが、しかしオリンピックが終わった後もこのままに仕事を続けられるわけではない、と悟っています。

現代の日本の都市部は、もはや飽和的に

整えられているとあって差し支えないでしょう。それでも都心ではタワーマンションが勢いよく生えつづけ、来るオリンピックに向けて新たな宿泊・商業施設が次々と誕生しています。その一方で、観光立国を謳っているが、観光資源と見なすべき旧き良き戦後建築が無残に取り壊される事例も後を絶ちません。

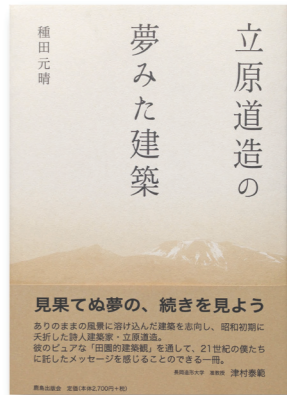
丹下健三には、大義がありました。焦土に立ち、できるだけ早く、そしてこれまで以上の生活を手に入れたいとの想いで、必死に都市を立て直しました。現代の我々は、そのおかげで不足のない都会暮らしを送れています。

しかし、もはや不足はありません。先人の渴望の必然性を顧みることなく、その情性走行のままに右上を見続けてしまっていてよいのでしょうか。我々がほんとうに欲しいものとはなんでしょうか。

十分に「都市」が整えられたいま、我々が真に欲しているのは、「田園」(ありのままの自然、あるいは、もともとそこにあった風景)ではないでしょうか。

実際、若手建築家のなかには、ありのままの自然を生かし、もともとそこにあった風景を大切に建築をつくる方々が少なくありません。もはや現代の先進的な建築家の渴望は、「都市」ではなく、「田園」に向きはじめているといえるでしょう。丹下の進化を遂げた建築家のなかに、いま、立原的DNAが覚醒をはじめているのです。

がむしゃらに人工環境を発展させる時代は終わりました。これからは、もともとそこにあった環境・風景を大切にするような、「田園」を志向する態度で建築をつくらねばなりません。どこか現代と似る80年前の日本を生きた立原道造が、描き遺した透視図を通じて、我々にそう教えてくれているのです。



主著『立原道造の夢みた建築』 単著 / 鹿島出版会 / 2016年

	丹下健三	立原道造
作品名	「大東亜建設忠霊神域計画」	「無題 [浅間山麓の小学校]」
制作年	1942年9月	1935年5月頃
背景の山	富士山	浅間山
画面の着色	単色	彩色
建築の表現	稜線の明瞭な直線描画	淡いフリーハンドスケッチ
山岳の表現	淡くやや抽象的	はっきりと具体的
建築の位置	右下	右下
山岳の位置	左上	中央上部
山岳と建築	直交 / 対峙	平行 / 包含

2つの透視図の比較